



編集後記

2020年度は、日本のみならず、世界中で新型コロナウイルスが猛威を振るい、不安と恐怖を感じながら感染症対策に振り回された一年でした。そして、緊急事態宣言の発令により、国民の生活に非常に大きな変化が生じた年でもありました。

生活面では、感染リスク低減のための「新しい生活様式」が公表され、“マスク着用”や“ソーシャルディスタンスの確保”が常識となり、一方、働き方では、テレワークが一気に浸透し、オンライン会議等によるリモート下でのコミュニケーションの在り方が普及するとともに、時差出勤や在宅勤務が日常となりつつあります。また、外出自粛要請と3密回避の観点から多くのイベントが中止になり、当協会でも60周年記念事業の延期、令和3年度新春技術者懇談会の中止など、多くの催しが中止や規模の縮小を余儀なくされました。

編集委員会においても、2020年3月以降、集合形式による委員会が開催できず、本誌「土と岩 69号」に関しては、すべてメール審議により、企画・構成から執筆者の選定と原稿依頼、受領原稿の校閲、デザイン構成等を行い発刊の準備を進めるといふ、コロナ禍における急激な変化の中での企画・編集作業となりました。

今回編集した「土と岩 第69号」では、岐阜大学 工学部附属インフラマネジメント技術研究センター 沢田 和秀様と株式会社シマダ技術コンサルタント 坪田 邦治様に寄稿いただいた論文を掲載しました。沢田様には、平成30年7月および令和2年7月に発生した豪雨災害を取り上げ、災害時の相互協力体制の必要性に関して執筆していただきました。また、坪田様には、“若手技術者に伝承できていないこと”として、「軟弱地盤上での低盛土道路における交通荷重」を取り上げ、繰返し三軸試験結果を用いた変形問題に関して執筆して

いただきました。近年、地質調査業界でも若手技術者不足や技術の継承に対する危機が叫ばれる中、今回執筆いただいた“大規模災害”や“軟弱地盤問題”は、次世代に引き継がねばならない重要課題であると考えます。今回掲載した論文が契機となり、多くの若手技術者がこれら諸問題に興味を持ち、疑問を抱き、そして課題解決に向けた取り組みを実践することを期待いたします。

さらに、毎号好評をいただいている「身近な地質スポット」を散文として掲載するとともに、中部地方整備局殿と当協会との意見交換会の内容も掲載しております。常設委員会報告も、昨年同様、6委員会2ワーキングの報告を紹介していますので、一読していただき、当協会の活動内容を知っていただければと思います。

本誌の締めくくりにあたりまして、改めて執筆に協力していただいた方々に感謝申し上げます。また、中部地方整備局の皆様には、意見交換会の開催のみならず、本誌の口絵を飾る写真の提供をお願いしました。重ねて御礼申し上げます。

なお、表紙写真は、見事に開花した桜を丸山ダムをバックに撮影したものです。「月刊 丸山ダム」に掲載されていた写真を、発刊者である“よっしー”様にお願いし、提供していただきました。ご協力、ありがとうございました。

今後とも、皆様の興味を呼び起こす話題を提供できればと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

編集委員会